

Ⅲ わらじ村長 鎌田三之助の挑戦

9 わらじ村長「鎌田三之助」の逸話

鎌田翁の生涯には多くの逸話と美談がある。それらは教訓と示唆に富む。その一端を紹介。内容は、『鎌田三之助翁傳』(故鎌田三之助翁頌徳会)から転載しているものである。

*

(役場の小使と間違えられる)

村長が村役場へ出勤されても、何時も土間に居るので、よく小使と間違われることが多かった。

或る日のことであった。県庁から若い技師が来られ、「わしは県から来たものであるが、一寸(ちよつと)煙草を買って来てくれ」と言われたので、「はいはい」といって買って来られると「村長はいないのか、鎌田村長はまだ出勤しないのか」と尋ねられるので「村長の鎌田は私でございますが、御遠方を御苦勞様でした」と言われると「これは、これは！」とひどく恐縮したということである。

(宿を断られる)

かような次第なので翁は旅に出られても、色々な扱いを受けたとのことである。その一つに紀元二千六百年の栄ある年に、祈願のため伊勢神宮と橿原神宮に参拝いたして、京都に廻られた時のことである。かの古洋服に草鞋(わらじ)姿で、「泊めていただきたい」と言って二、三軒の宿を尋ねられたが、皆断られた。今度断られたならば警察署へでも行って御世話を願うと思いながら四軒目の宿を尋ねると、玄関で案の定、断られたので出ようとされた時、奥から主人らしい男の人が出て来られて「是非お泊り下さい」と愛想よく言われた。

そして通されたのが立派な一番奥の八畳の部屋であった。主人がわざわざ挨拶に来られ「店の者が存じませぬ事とて、とんだ失礼をいたしました。あなたのような方をお粗末にいたしては罰が当たります」と、言われた。「さて京都には知人がない筈なのに、どうして私を知っているのか」と尋ねられると、新聞で「翁のことを読んで知っている」と言われたということである。

(旅の乞食僧と間違われる)

又、翁が東京に行かれた時のことである。宿についてその翌朝、宿の仏壇をお借りして般若心経を誦じて居ると、その室に寝ていた老婆が起きて、躰(やが)て翁の前に御布施を差し出したのである。老婆は翁を乞食僧とでも思ったことであろう。そこで翁は「お婆さん、私は当家に厄介になっている客であります。その客が御布施など貰っては……」と大笑いしたとのことである。

(駅で出迎え人に見過ごされる)

次にこんなこともあった。名取郡の某村に講演を依頼されて行かれた時のことである。例によって青年団員二名が停車場まで迎えに出たが、村長さんらしい人が来ない。遂に汽車はホームを離れ、改札係は扉を閉めて消えた。確かにこの時間に着くと言って来た筈だが見えない。今日の日程に大番狂が出てしまったと、少々(しょうしょう)興奮して会場に戻って来た。「村長は来られなかった」と大きい声で報告したが、ひょいと講師席を見ると古洋服を着た爺さんが腰掛けて居られるのである。その方が今日の講師としてお招きした鎌田村長さんなのであった。

(三山詣でと間違われる)

又、某郡の停車場で、夏の節特に三山詣の乗り降りの人が多い某村に、講演を依頼されて行かれた時のことである。代表の方々が自動車で駅まで迎えに出たが、幾ら見ても鎌田村長さんらしい人が見えない。「なんだ三山詣の人々をお迎えに出た様なものである」と言って帰った。この時、翁は夏服に莫座(ござ:イグサで編んだ敷物)の姿で来られたので、全く三山詣の人と見間違いられた訳である。

出典:『鎌田三之助翁傳』(故鎌田三之助翁頌徳会 1953年出版)

(注) 原文に使用されている旧漢字は、現代漢字に変換している。また、必要と思われるものにはふりがな、説明を加えた。()の見出しは、今回追加した。



▲いつも持ち歩いていたゴザむしろを背負った鎌田翁の像